

# 世界から見た日本 「京都」の素材を活かして

「日本は鎖国時代の発想と縁を切って、世界に通用するソフト戦略づくり」  
「早急に取り組まなければならぬ」  
物言の学者として、  
政府や、科学者たちに提言する  
日本学術会議会長の黒川清氏に、  
これからの京都と日本について伺った。

**黒川 清** 日本学術会議会長

くろかわ きよし  
1962年東京大学医学部卒。1967年同大学院医学研究科修了。医学博士。南カリフォルニア大学医学部内科準教授。カリフォルニア大学ロサンゼルス校医学部内科教授。東京大学医学部第一内科教授。東海大学医学部長、同総合医学研究所長などを歴任し2003年日本学術会議会長に就任。内閣府総合科学技術会議議員を務める。2004年より東京大学先端科学技術研究センター客員教授、東海大学総合科学技術研究所教授。



国立京都国際会館は、宝ヶ池の美しい自然に囲まれた交流拠点

**日本が激的に変化した40年**  
国立京都国際会館はユニークなデザイン、周囲の環境ともにはばらしい交流拠点です。世間の喧騒から離れ、豊かな自然の中で、じっくりと意見を交換するのに最適な場所といえます。地下鉄ができてからは、懸案だったアクセスも非常によくなりました。さらに注文するとすれば、京都全体で2万〜3万人クラスの国際コンベンションに対応できるキャパシティがほしいところです。  
1966年の国際会館オープンから今日までの40年間に、時代は大きく変化しました。東京オリンピック開催（64年）当時を振り返ってみる

と、大卒初任給は約60ドル（2万1900円）。大学進学率は16%（男性26%、女性5%）。テレビを前に一家団欒に花が咲き、日本人の海外旅行者数は年間およそ12万8000人、日本の労働者の3割が一次産業に携っていました。

また、この40年は、日本の伝統的な町並みが失われ、全国どこへ行っても、コンクリートで覆われた同じような景色に変わっていった時代でもあります。京都の景観もずいぶん変わってしまいました。それでも日本らしい趣を色濃く残す数少ない都市の一つです。

## 国の品格はソフトで決まる

海外の人にとって、日本は「一度は行ってみたい国」かもしれませんが、何度も行きたいと思う人は多くはないでしょう。「日本はビジネスだけの金持ち国」というのが、世界の一般的な認識だからです。最近ようやく漫画やアニメのようにグローバルな発信力のあるソフトも出てきました。文化大国といわれるフランスを見ればわかるように、国家の信用はお金だけではありません。フランスだけではなく、品格が感じられる国はソフトの育成や保護に力を入

れ、世界に向けた広報戦略を持っています。

日本はいまだに脱却できずにいる鎖国時代の発想と縁を切って、「世界でどう見られているか、またどう見てほしいのか」を念頭に、世界に通用するソフト戦略づくりに早急に取り組まなければいけません。

またグローバル社会においては、温暖化など科学的判断を必要とする地球規模の問題が山積しており、日本が世界やアジアのなかでどのようにコミットしていくかが問われています。これからの国や政策づくりはもろもろのこと、国際政治の舞台においても、科学者コミュニティに求められる役割や責任は、今まで以上に大きくなっています。

## 伝統維持と効率の両立が課題

国際会館では、数多くの国際学会が開催されてきました。特にCOP3（気候変動枠組条約第3回締約国会議）の「京都議定書」や世界水フォーラムの開催を通して、京都の国際的なブランドイメージが確立されてきたと思います。京都も今後は世界から見た京都の魅力は何か」という視点で、ブランド力を生かした都市戦略を考えていくべきです。昨年、公開されたハリウッド映画

『SAYURI』（ロブ・マーシャル監督、2005年）で描かれた京都は、海外の人が持つ京都の典型的なイメージといえます。国や都市を訪れたくなる魅力とは、整備されたハードインフラや経済的な豊かさよりも、歴史や伝統が息づく町並みや人々の暮らしの中にある。近代的な高層ビルではなく、京都の伝統的な木造建築や狭い路地に育まれた文化こそ、訪れた人が京都で見たいものでしょう。道が多少狭くても、観光客にはいたした問題ではありません。ベネチアは自動車どころか自転車も乗り入れ禁止ですが、毎年、世界中から多くの観光客が訪れています。

問題は伝統と文化を、効率やアメニティとに両立させていくかです。たとえば、建物の外観は京都らしい「木の文化」を保ち、内側を機能的で快適にする工夫を行政や企業、市民が協力して進めていくことはできないでしょうか。電線の地下化も京都はもろもろ、公共事業として全国で実施すべき課題だと思えます。京都をどのような地域にしたのか、日本の心が凝縮された交流拠点として発信するために、京都の住民のみならず、日本全体で考えていくテーマだと思います。

## COP3

## 地球温暖化防止京都会議

**環境に優しいまちづくりが始動**  
京都の国際的な知名度を一躍高めたのが、1997年12月に開催された国連主催の「気候変動枠組条約第3回締約国会議」（COP3）地球温暖化防止京都会議だ。法的拘束力を持つ温暖化ガス削減計画をめぐって紛糾し、一時は採択が危ぶまれたが、最終日も徹夜で討議を続行。会期を1日オーバーして、「京都議定書」（Kyoto Protocol）が採択された。世界的に関心の高いテーマ、難航の末の歴史的な成果という点もあって、京都発のニュースは連日世界中のメディアで大きく扱われた。その後も京都議定書は海外で「Kyoto」と略称されることが多く、広



報効果は絶大だったといえる。会議を機に環境問題に対する市民の関心も高まった。COP3後、京都市はCO<sub>2</sub>の10%削減を正式な政策目標として掲げ、「ゴミ収集車の燃料をすべて天ぷら油の廃油に切り替えるなどの取り組みを開始。環境問題を最重要課題としてまちづくりを進めていく」という地域のコンセンサスもでき、後の「世界水フォーラム」など環境関連の重要会議の誘致にもつながっている。

## 第3回世界水フォーラム・閣僚級国際会議

**京都の地域特性を活かした賞を創設**  
世界の水の使用量は過去1世紀の間に6倍に増え、アジア・アフリカの30カ国以上が深刻な水不足に直面しているといわれる。国際シンクタンク「世界水会議」が主催する「世界水フォーラム」は、水問題の改善を通して世界の平和と安定への貢献をめざす国際会議で、1997年から3年ごとに開催。03年3月の第3回フォーラムは主会場の国立京都国際会館と、大阪・滋賀（琵琶湖・淀川流域）で行われた。日本政府主催の閣僚級国際会議も併催され、約180の国・地域の閣僚級130人以上を含む1300人が参

加閣僚宣言を採択した。京都は古来、良質な水で知られ、京友禅、清酒、湯葉などの伝統産業は水と関わりが深い。川床料理のような独特の水辺の文化も発達、水にこだわりを持ち、水を大切にしている土地柄だ。京都市は開催を機に「京都水宣言」を発表し、「京都水づくり賞」を創設。京都市も世界水会議と共同で「京都世界水大賞」を創設し、インドのNGOに第1回の大賞が贈られた。また、2004年に設立されたNPO「日本水フォーラム」が、第3回フォーラムの事務局の活動を引き継いでいる。